

父の日に想う

「日本のお父さん達はどこにいるの?」。アメリカ人との会話で出てきた一言だった。昭和生まれの世代ではとかく家庭における父の存在感は薄かったように思う。今年は大リーグで大谷翔平選手が「父親リスト」に入り、話題となった。選手がチームを離れてパートナーの出産に立ち会う権利を行使することを指すが、これまで日本ではほとんど知られていなかった。

今年6月15日(日)が父の日である。しかし6月に父の日があることは日本ではどれだけ話題になっているだろうか。5月の母の日の方がよく知られていると感じる。そして日本で母の日を始めたのは(諸説があるようにせよ)青山学院であるというのは学院関係者を始め、世間一般にも知られつつある。相模原キャンパスがあるJR横浜線の淵野辺駅付近では4月半ば頃から“Aoyama Gakuin: The Birthplace of Mother's Day”と記された赤いカーネーション

ンが付いた白いバナナが掲げられる。その時期に青山キャンパスでも相模原キャンパスでも構内を歩けばきつと目にするであろう。

母の日の起源に関しては日米共にメソジスト教会が関係している。そもその起源であるが、1908年にアメリカのウェスト・ヴァージニア州にあるアンドリユース・メソジスト・エピスコパル教会でアンナ・ジャービスが始めたそうである。日本では1913年にアメリカ・メソジスト宣教師で、青山女学院で長年教鞭を執ったマイラ・ドレーパーが母の日を初めて祝賀行事として執り行った。

父の日はやはりアメリカと教会が関係している。ソノラ・スマート・ドッドが教会のメッセージを聞いて、母の日があるのだから父の日を作ろうと思いつき、教会、YMCAや行政機関に掛け合って1910年に運動となったそうだ。ところが、日本に父の日がもたらされたこ

2017)

冒頭の言葉に戻るが、日本における昭和生まれの世代が抱く父親像は仕事に勤しむ寡黙な存在ではないだろうか。家庭よりも仕事が優先される。心理学者の河合隼雄はそんな日本の諸相を「父なき時代」と表現した。最近父親が子どもの学校行事や課外活動に積極的に参加する姿をよく目にするが、それはとても励みになる。しかしながら、私たちの世代ではそれらはかなり珍しい光景だったし、個人的には思いつくことができない。

昭和世代では「モーレッツ社員」や「企業戦士」といった言葉が流行った。自分が高校生の時はあるCMで「24時間戦えますか!」というセリフが流行り、仲間同士でも口ずさんでいた。あるいは、父の家庭での中途半端な存在を揶揄した「亭主元気で留守がいい」なんていうCMのセリフを自虐的に笑い合ったような世の中でもあった。

我が家に関して言えば、そこまで家庭での存在感が希薄ではなかったにせよ、父・武夫は昭和と平成は母に家庭を任せて、とにかく仕事に一途に打ち込んでいた。その父を亡くしたのは昨秋だ。94歳と長寿だった。父は外交が仕事だった。故に父に連れて行ってもらった場所は非日常的なところから挙げると、アメリカのグランドキャニオン、ドミニカ共和国のカリブ海のリゾート、パングラデシュで大洪水を起こしたブラマプトラ川、ニュージーランドのケープルカーが登る街並みなど枚挙にいとまがない。話は遡るが、1950年に祖父・貞夫が大洋

ホエールズ(現横浜DeNAベイスターズ)の初代球団代表を務めた。そのこともあり、5歳頃だったと記憶しているが、父は私をオープンしたばかりの横浜スタジアムに野球観戦に連れて行ってくれた。現在のプロ野球ではあまり見られないが、1塁側のダグアウトの上にチャリダーが踊りながら「よ・こ・は・ま・た・い・よ・う・ホエールズ!」と歌っていたのを内野席で父と見たのは覚えている。自分の趣味であるスポーツ観戦はそのように父との時間で始まった。



父(左)と筆者(右)、41年振りに再訪した横浜スタジアムにて

翻って自分を振り返る。私は結婚し、子どもが生まれてから妻と子どもと時間を過ごす計画を立てることが多くなった。できれば遊園地、公園、ショッピングモール、温泉など「せっかくだから」と大きく考える傾向があった。どこか遠いところに行つて泊まれるならば、なおそうしたがる。父が自分を様々なところに連れて行ってくれたことを思うと、自分の子どもにもそのようにしてあげられたらと、つい思う。

しかし、理想を求めることの落とし穴は無条件の愛を示す神と、「今ここ」にあることに目がいかなくなることだ。旧約聖書の出エジプト記17章1節から7節には、モーセと大勢の避難民となったユダヤ人達が砂漠をさまよい、水が不足し、命の危機にさらされている姿が描写されている。民の不平不満に追い込まれたモーセ

とに教会は関係していないようである。日本で1950年代から散発的に始まった父の日の普及活動は、1980年代になってようやく日の目を見た。それをけん引したのはファッション業界や百貨店である。その結実として、素敵なお父さんとして認められた著名人がドレスアップして「ベストファーザー」の授賞式に出たり、イエローボン賞を受賞したりした姿を見た方もいるであろう。

それにしても父の日は日本では存在感が薄い。母の日と父の日の設立運動の精神的基盤となった聖書は父のイメージについて何を語っているのだろうか。聖書が教える父なる神は次のように私たちに人間に無条件の愛を示している。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ3:16新改訳聖書)

は、逃げることに、民に反論することではなく、神に思いの丈をぶつけることを選択する。神が彼に目を向かせたのは、遙か彼方にある水ではなく、「今ここ」にある木の杖と神が指し示したホレブの岩だった。神の言葉に従って岩を木の杖で叩いたら、果てしなく水が流れ出て、それを飲んだ民は危機を脱したという話である。

さて、最も印象に残っている亡き父との思い出はと聞かれると、諸外国の観光名所でのことでも、横浜スタジアムでのことでもない。それは3歳の時、一緒に散歩した時のことである。当時住んでいたのは目黒駅からさほど遠くないところにあつたマンションだった。急坂にマンションが建つていて、坂を下りて目黒川の方によく散歩に行った。目黒川は今では桜の名所であり、おしゃれなカフェやレストランが並ぶ。しかし、幼少期の昭和後期は東京でも一、二を争う汚染された川で、400メートル程離れた我が家でも悪臭が漂うことが度々あつた。父は時折自分を連れて目黒川の方面に散歩に連れて行ってくれた。父は私を肩に乗せ、楽しそうに「ミキたん、ミキたん、ミキたん」と繰り返して歌いながら歩いていった。その時の父の声や歌が、近所の歩道や公園がある日の午後と一緒に歩いたことが、名だたる観光地を差し置いて最も印象に残っている。

父の役割を子に果たす。限られた時間と体力の中で理想を求めても仕方がない。それはごく何でもない時、何でもないと、何でもないことを「今ここ」で愛をもって共有することではないか。